トルコ

長場（ながば） 紘（ひろし）

本稿は1978年から85年までのおよそ8年間に日本語（翻訳を含む）で発表されたトルコに関する主要な研究成果を論評，紹介するものである。しかしながら，その対象時期をトルコ共和国の成立（1923年）以降に限定すると検討されるべき研究成果の数は必ずしも多くない。したがって，ここではトルコ共和国の成立に先行するオスマン帝国の末期，すなわちその衰退から改革と近代化への模索，そしてトルコ共和国の成立へつながる19世紀末にまでさかのぼって範囲を広げることにする。

紙幅の関係で文末の文献リストには30数点の研究成果を上げるにとどめた。そのうえ本文でもいくつかの重要な成果の内容に触れることができなかった。

最初に永田雄三他『中東現代史 I』〔27〕を取り上げる。本書はトルコ，イラン，アフガニスタンの3カ国で構成されるが，永田執筆になるトルコの部分が全体の半分以上を占める。政治と社会に重点をおいた最新かつ詳細な通史として本書は多くの研究者に活用されると思われる。イギリスのジャーナリストであるホサムが著わした『トルコ人』〔29〕は1960年代までのトルコ人と経済，宗教，軍事，文化，ケマリズムなどトルコのほとんどの領域にわたって精緻に分析・論評する。本書はトルコの過去の現実のみならず，今日の現実を理解するためにもその有効性をなお十分に保持していると評価できる。

トルコ共和国を語る際，われわれは建国の父と尊称されるケマル・アタチュルクの名を看過することはできない。近代ヨーロッパを手本にアタチュルクが着手して成就させた種々の改革事業によって，トルコはわずか30年たらずの間に古いオスマン体制から脱却して，新しい共和制国家へ変身した。大島直政『ケマル・パシャ伝』〔10〕は明治維新と対比させるといういささか強引と思える史観でまとめたアタチュルクの伝記である。アタチュルクの改革事業のなかでとりわけ注目されるのは世俗化（政教分離）政策である。山本新は「トルコの欧化による世俗化」〔35〕で世俗化を「宗教が威力と生命力を失い，後退し，形骸化する現象，つまり宗教がもっていた社会的・文化的リーダーシップを失なうことである。しかし，宗教が無くなるのではなく，重要性を失ない，政治や経済や文化の諸活動が宗教的理念の束縛から解放され，自由となること」と規定する。15世紀に始まり19世紀に頂点に達するオスマン帝国における世俗化は外発的であるが，アタチュルクによるそれは内発的なものである。ただ，両者に共通する点は世俗化＝西欧化にある。

19世紀末から20世紀の20年代初頭にかけて展開された一つの帝国の崩壊過程と新生国家の誕生と

いうドラマは，歴史研究者にとってかなり魅力あるテーマに違いない。わが国においても新井政美〔3～7〕，設楽国廣〔18，19〕などがこのテーマを追求してすぐれた成果を発表している。新井はこの期間におけるナショナリズムに関心を示し「『ゲンチ・カレムレル』と青年トルコ人」〔6〕で次のように論証する。トルコのナショナリズムは特異な形で存在している。その特異性とはナショナリズムの担い手が，(1)オスマン帝国の支配者，(2)ロシア帝国の支配を受けていたトルコ系の人びと，の二つの流れに分断されていたことである。さらに，国家的利害（政治的統合）と民族的利害（民族的統合）が合致しないのみならず，この二つを一つのナショナリズムが追求していることであるとする。前述の新井論文〔6〕は1908年サロニカで刊行された『ゲンチ・カレムレル』誌の検討をとおしてナショナリズムの全般的な展開を解明する。ところで，オスマン帝国末期からトルコ共和国成立までのナショナリズムの中心的な潮流はトルコ主義（Türkçülük）である。新井「トルコのナショナリズム思想に関する一考察」〔3〕ではこのトルコ主義の理論的指導者であり，トルコ・ナショナリズムの父といわれるズィヤ・ギョカルプ（1876～1924年）を取り上げてその生成から発展過程，影響を詳細に論証する。設楽は「青年トルコ人革命前史」〔18〕と「第2次立憲制成立直後の状況」〔19〕で1908年の青年トルコ人革命の原因，経過とその意義の分析を試みる。他方，岡野内正は「自由貿易体制下におけるオスマン帝国財政についての覚書」〔11〕と「トルコの財政改革と『フォスター・ホバート報告』」〔12〕において経済問題を論じている。

トルコ共和国を対象とした研究成果を一瞥して気づくことは実態調査にもとづいた成果がとくに目につくことである。遊牧民や遊牧生活についての具体的な事実に関する大方の日本人の知識は非常に乏しい。アラブ諸国と同様にトルコにおいても遊牧民人口は減少の一途をたどっている。1923年前後で約100万人と数えられたトルコ系遊牧民（ユルック）の大部分は定住生活に入り，今日ではおそらく10万人をかなり下回る数に減少したと推定される。松原正毅『遊牧の世界』〔32〕は1979年7月から約1年間チョシル・ユルックと遊牧生活を体験した貴重な社会的・経済的調査記録である。乾燥地域における人間居住の問題の一つとして，飲料水供給をテーマに地理学の側面から実施した実態調査の成果が金坂清則「内陸アナトリア・コンヤ県の村落の飲料水供給」〔14〕と「トルコにおける給水事情と給水事業」〔15〕である。〔14〕においてトルコ中央部のコンヤ県を対象に地名に泉や井戸名を冠する村落の分布，村落における水源，給水事情，共同給水システムを明らかにし，さらに人口増加と電化との関連性にも言及している。この問題は前述の松原〔32〕が提示した遊牧民の生活とも深く関わっていることに注目したい。

加納弘勝「アンカラのスラム」〔16〕は第三世界の都市に典型的にみられるスラムの問題をアンカラ大学のケレシュ教授とともに実施した調査結果の分析である。トルコの都市問題としてのスラムはゲジェコンドゥ（一夜建ての家）問題に集約される。ゲジェコンドゥは本来的には家屋を意味するが，それが密集している地域，そこに定住する人間集団，そしてスラム，下層社会といった含意で広く使われている。この調査によって政府のゲジェコンドゥ政策，アンカラにおける実態，ゲジェコンドゥ住民の社会的態度，ゲジェコンドゥ住民化へのプロセスといった諸側面が明らかにされる。

経済の領域では有田稔「トルコ共和国の経済体

制研究とそれに伴なう混合経済の概念整理」〔8〕が1930年代初期に形成されたエタチズム（混合経済体制）の成立背景とその実際的側面を明治期日本との比較において論じ，橋本和司は「輸入代替による工業化路線とその教訓」〔28〕で輸入代替と対トルコ援助の2点に焦点を合わせて第2次大戦後の工業化による経済発展のプロセスを析出する。

政治発展に関する鈴木薫の「トルコに於ける議会制的伝統とその危機」〔21〕は20世紀初頭にまでさかのぼって議会制成立の歴史的背景とその定着化過程，1970年代の政治危機までを詳細に跡づける。さらに，この問題は「トルコ——発展と連合政治の危機——」〔22〕でも十分に展開されている。先に触れたようにトルコは世俗国家であるが，1970年代における政治，社会危機に際してイスラムが再評価されつつある情況変化を的確に照射した山内昌之のすぐれた論考「トルコ——アイデンティティの危機——」〔34〕も看過できない。

〔文献リスト〕

〔1〕青木緒一郎「トルコ——動揺続く東西の接点——」（『世界』第414号 1980年5月）。

〔2〕青木緒一郎「トルコ軍事クーデターの行方」（『世界』第420号 1980年11月）。

〔3〕新井政美「トルコのナショナリズム思想に関する一考察——ズィヤ・ギョカルプを中心に——」（『史学雑誌』第88巻第2号 1979年2月）。

〔4〕新井政美「《青年トルコ》革命以前におけるナショナリストの動向」（『史学雑誌』第89巻第11号 1980年11月）。

〔5〕新井政美「『トルコ協会』の設立とその活動——Türk Yurdu 創刊前史——」（『東洋学報』第65巻第3・4号 1984年3月）。

〔6〕新井政美「『ゲンチ・カレムレル』と青年トルコ人——ナショナリズム研究の視点から——」（『史学雑誌』第93巻第4号 1984年4月）。

〔7〕新井政美「『三つの政治路線』への2つの反論 トルコ・ナショナリズム生成期における思想状況の一端」（『人文研究』〔大阪市大〕第36巻第9号 1984年）。

〔8〕有田稔「トルコ共和国の経済体制研究とそれに伴なう混合経済の概念整理」（『徳山大学論集』第23号 1985年6月）。

〔9〕池田博行「トルコの交通政策史 バグダッド鉄道建設史」(1)(2)（『専修大学社会科学研究所月報』第247，248号 1984年2，3月）。

〔10〕大島直政『ケマル・パシャ伝』（新潮選書）新潮社 1984年。

〔11〕岡野内正「自由貿易体制下におけるオスマン帝国財政についての覚書」（『経済学論叢』〔同志社大学〕第35巻第4号 1985年5月）。

〔12〕岡野内正「トルコの財政改革と『フォスター・ホバート報告』」（『経済学論叢』〔同志社大学〕第36巻第3／4号 1985年11月）。

〔13〕海外経済協力基金総務部業務課「トルコ共和国の法制度」（『基金調査季報』第44号 1983年11月）。

〔14〕金坂清則「内陸アナトリア・コンヤ県の村落の飲料水供給」（『経済地理学年報』第31巻第3号 1985年）。

〔15〕金坂清則「トルコにおける給水事情と給水事業——村落地域の場合——」（『人文地理』第37巻第5号 1985年10月）。

〔16〕加納弘勝「アンカラのスラム——社会経済危機と自暴自棄型の社会的態度——」（『アジア経済』第25巻第4号 1984年4月）。

〔17〕佐藤忍「『トルコ人ストライキ』(Türkenstreik)——ガストアルバイター問題の転換点として——」（『研究年報経済学』〔東北大学経済学部〕第46巻第1号 1984年）。

〔18〕設楽国廣「青年トルコ人革命前史——レスネのニヤーズィ蜂起の歴史的意義——」（『オリエント』第21巻第1号 1978年1月）。

〔19〕設楽国廣「第2次立憲制成立直後の状況——青年トルコ人革命の内部抗争——」（『イスラム世界』第16号 1979年8月）。

〔20〕末尾至行「トルコにおける水力利用とその近代化」（『歴史地理学紀要』第25号 1983年3月）。

〔21〕鈴木董「トルコに於ける議会制的伝統とその危機」（『中東通報』第276号 1981年5月）。

〔22〕鈴木董「トルコ——発展と連合政治の危機——」（宮治一雄編『中東の開発と統合』アジア経済研究所 1985年）。

〔23〕溜池良夫他訳・解説「一九八二年トルコ国際私法（資料）」（『法学論叢』〔京都大学〕 第115巻第4号 1984年7月）。
〔24〕中東協力センター『トルコ共和国の経済情勢とわが国協力分野の分析』 1984年。
〔25〕中東協力センター『トルコ経済――構造調整の行方――』 1985年。
〔26〕中東経済研究所『トルコ――政治と経済の現状――』（改訂版） 1984年。
〔27〕永田雄三・加賀谷寛・勝藤猛『中東現代史 I トルコ・イラン・アフガニスタン』 山川出版社 1982年。
〔28〕橋本和司「輸入代替による工業化路線とその教訓――トルコの場合――」（『基金調査季報』 第36号 1980年12月）。
〔29〕D・ホサム著 護雅夫訳『トルコ人』 みすず書房 1983年。
〔30〕M・マカル著 尾高晋己・勝田茂訳『トルコの村から』 社会思想社 1981年。
〔31〕松谷浩尚「トルコの安全保障」(1)～(5)（『中東通報』 第267, 268, 270, 271, 272号 1979年11月，1980年1，5，7，9月）。
〔32〕松原正毅『遊牧の世界――トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から――』（上）（下）（新書判） 中央公論社 1983年。
〔33〕松本一郎「中近東トルコ発展期に於ける海運業研究」（『海事交通研究』 第26号 1985年）。
〔34〕山内昌之「トルコ――アイデンティティの危機――」（山内昌之『現代のイスラム――宗教と権力――』 朝日新聞社 1983年）。
〔35〕山本新「トルコの欧化による世俗化」（『神奈川大学創立50周年記念論文集』 1979年）。

（アジア経済研究所資料・情報相談室参事）